# 浦島子伝承の変容

瀧音能之

## 一、問題の所在

現在、数多く残されている昔話のなかでも『浦島太郎』の話は、もっともよく知られているもののひとつであろう。「昔々浦島は、助けた亀に連れられて」という童謡もまた有名である。しかしながら、いまわたくしたちが思い起こす浦島太郎のイメージは、実は中世末期から近世初期にかけて流行した「御伽草子」のなかの『浦島太郎』が直接的なルーツとなっている。つまり、直接的な起源は古代にまでさかのぼるものではなく、その意味ではさほど古いものではない、ということがいえる。

しかし、さらにそのルーツをたどっていくならば、古代の浦島子伝承にまでさかのぼることになり、この伝承自体は、おそくとも六世紀代には形成されていたという指摘がなされている。(1) 実際のところ、浦島子伝承は、初期の史料としては、『日本書紀』『万葉集』、そして、『丹後国風土記』の逸文などに姿をみせており、その歴史の古さをかいまみせてもいる。

こうした浦島子伝承の研究としては、つとに高木敏男氏による「浦島伝説の研究」(『日本神話伝説の研究』所収、一九二五年)があげられるが、その後、こと歴史学的な論及という点では近年までさほどなされなかったようにみうけられる。それが、一九七〇年代後半以降にいたって、水野祐氏による『古代社会と浦島伝説』(雄山閣出版、一九七五年)、重松明久氏による『浦島子伝』(現代思潮社、一九八一年)が公刊され、さらに、一九八六年には下出積與氏によって『古代神仙思想の研究』(吉川弘文館)が上梓された。これら三氏の著作によって、浦島子伝承の史的研究は大きく進展し、現在にいたっているといえるが、

さらに検討が必要と思われる問題もあるように思われる。たとえば、浦島子伝承には多くの要素の混入が指摘されているが、成立当初の性格はどのようなものであったか、という点について考えるならば、いまだ不明瞭なところが多々あるようにもみうけられる。また、それが、後世どのような展開をみせたかという点についても検討すべき点が少なからず残されているように思われる。

本稿では、以上のことをふまえてまずはじめに、浦島子伝承の成立当初の状況に焦点をあてて、その成立基盤について考えてみることにする。(2) そして次にそれをふまえて、浦島子伝承がどのように展開され、それに伴っていかなる変容をとげていったかについて考察を加えることにしたい。

## 二、文献にみられる浦島子伝承

まずはじめに、『日本書紀』『万葉集』、そして『丹後国風土記』にみえるそれぞれの浦島子伝承について具体的にとりあげ、そこに記されている内容の概略について把握することにする。

最初に『日本書紀』からみるならば、雄略天皇二十二年秋七月条に、

丹波国余社郡管川人水江浦島子乗レ舟而釣。遂得二大亀一。便化二為女一。於レ是浦島子感以為レ婦。相逐入レ海。到二蓬莱山一歴二観仙衆一。語在二別巻一。(3)

とある。これによると、伝承の舞台となっているのは丹波国の海岸である。主人公の浦島子は、「水江浦島子」と表記され、「余社郡の管川の人」となっている。浦島子は漁師であり、つりあげた大亀が変身した乙女と夫婦となって共に「蓬莱山(とこよのくに)」、つまり常世国へおもむいたと記されている。蓬莱山についてからの様子については、「語(こと)は別巻に存り」とあるばかりで詳細はまったく不明である。

一方、『万葉集』をみると巻九（一七四〇、一七四一）に、

春の日の　霞める時に　墨吉の　岸に出で居て　釣船の　とをらふ見れば　古の事そ思ほゆる　水江の　浦島子が　堅魚釣り　鯛釣り矜り　七日まで　家にも来ずて　海界を　過ぎて漕ぎ行くに　海若の　神の女に　邂にい漕ぎ向ひ　相誂ひ　こと成りしかば　かき結び　常世に至り　海若の　神の宮の　内の重の　妙なる殿に　携はり　二人入り居て　老いもせず　死にもせずして　永き世に　有りけるものを　世のなかの　愚人の　吾妹子に　告げて語らく　須臾は　家に帰りて　父母に　事も告らひ　明白のごと　われは来なむと　言ひければ　妹がいへらく　常世辺に　また帰り来て　今のごと　逢はむとならば　この篋　開くな勤と　そこらくに　堅めし言を　墨吉に　還り来りて　家見れど　家も見かねて　里見れど　里も見かねて　怪しと　そこに思はく　家ゆ出でて　三歳の間に　垣も無く　家減せめやと　この箱を開きて見てば　もとの如　家はあらむと　玉篋　少し開くに　白雲の　箱より出でて　常世辺に　棚引きぬれば　立ち走り　叫び袖振り　反側び　足ずりしつつ　たちまちに　情消失せぬ　若かりし　膚も皺みぬ　黒かりし　髪も白けぬ　ゆなゆなは　気さへ絶えて　後つひに　命死にける　水江の　浦島子が　家地見ゆ

反歌

常世辺に住むべきものを剣刀己が心から鈍やこの君(4)

という長歌と反歌とがみられる。『万葉集』では、この伝承の舞台は、「墨吉」となっている。墨吉というと、摂津国の墨吉がまず思い起こされる。しかし、この墨吉については、摂津国でなくて丹後国であるとする説もみられる。また、主人公の浦島子は『日本書紀』の雄略紀と同様に「水江の浦島子」と記されており、漁師として姿をみせている。

浦島子は漁に出て乙女と出会うが、この乙女は「海若の神の女」であって『日本書紀』にみられるような亀の化身とは異なっている。また、浦島子が乙女と共に向かったところは「常世」となっている。さらに、『万葉集』の内容で興味深いことは、浦島子が常世国へ至ってからの行動が記されていることであり、この点に関しても『日本書紀』とはずいぶんと異なりをみせ

ているといえよう。

最後に、『丹後国風土記』逸文の浦島子伝承をみるならば、[5] まず冒頭に

与謝郡　日置里　此里有二筒川村一　此人夫　旱部首等先祖名云二筒川嶼子一

とある。ここから、伝承の舞台が丹後国の与謝郡であり、主人公の浦島子は「筒川嶼子」と表記されていることが知れる。ここにみられる「嶼子」という表記は、『日本書紀』や『万葉集』にはみられず、『丹後国風土記』の特徴のひとつとなっている。さらに、この嶼子は「人夫」、つまり、一般の民衆とされているが、それと同時に在地の豪族である日下部首の先祖ということにもなっている。

これに続けて、『丹後国風土記』には、

為レ人　姿容秀美　風流無レ類　斯所レ謂水江浦嶼子者也　是旧宰伊預部馬養連　所レ記無二相乖一　故略陳二所由之旨一

として、嶼子の性格を描写し、伊預部馬養連が記録したものと相違がないとしている。ここから、『丹後国風土記』が編纂される以前に、浦島子伝承は伊預部馬養連によって記録されていたことが知られる。しかし、残念ながら伊預部馬養連による浦島子伝は現在残っていないため、その内容にたちおよぶことはできないのであるが、『丹後国風土記』によれば、在地の浦島子伝承を忠実に記録していたとしている。

さらに、『丹後国風土記』をみるならば、

長谷朝倉宮御宇天皇御世嶼子独乗二小船一　汎二出海中一為レ釣　経二三日三夜一　不レ得二一魚一　乃得二五色亀一

とある。雄略天皇の時代に嶼子が小船を操って漁に出たが、三日三晩、一尾の獲物にも恵まれなかったとある。この記載は、先にみた『万葉集』に「堅魚釣り　鯛釣り矜（ほこ）り　七日まで　家にも来ずて」という状況と比較するとまったく好対照である。

しかし、嶼子は、ここで五色の亀を得、この亀が乙女となるのである。そして、

心思二奇異一　置二于船中一即寝　惣為二婦人一　其容美麗　更不レ可レ此　嶼子問曰　人宅遥遠　海庭人乏　詎人惣来　女婦微

咲対曰　風流之士　独汎二蒼海一不レ勝二近談一　就二風雲一来　嶼子復問曰　風雲何処来　女娘答曰天上仙家之人也　請君勿レ疑　乗二相談之受一　爰嶼子知二神女一　慎懼疑レ心　女娘語曰　賤妾之意　共二天地一畢　倶二日月一極　但君奈何　早先二許不之意一　嶼子答曰　更無レ所レ言何懈乎　女娘曰　君宣三廻レ棹赴二于蓬山一　嶼子従往　女娘教令レ眠レ目即不意之問　至二海中博大之島一　其地如レ敷レ玉　闕臺晻映　楼堂玲瓏　目所レ不レ見　耳所レ不レ聞

とあるように、乙女に導かれて嶼子は「蓬山」、すなわち常世国へ至ることになる。常世国は海中の広大な島と記されており、その様子は、

携レ手徐行　到二一太宅之門一　女娘曰　君且立二此処一　開レ門人レ内　即七竪子来　相語曰　是亀比売之夫也　亦八竪子来　相語曰　是亀比売之夫也　茲知二女娘之名亀比売一　乃女娘出来　嶼子語二竪子等事一　女娘曰　其七竪子者　昴星也　其八竪子者　畢星也　君莫レ怪焉　即立レ前引導　進二入于内一女娘父母共相迎　揖而定レ坐　于レ斯　称二説人間仙都之別一　談二議人神偶会之嘉一乃薦二百品芳味一　兄弟姉妹等　挙レ杯献酬　隣里幼女等　紅顔戯接　仙哥寥亮神儛逶迤　其為二勧宴一　万二倍人間一　於レ茲不レ知二日暮一　但黄昏之時　群仙侶等　漸々退散　即女娘獨留　雙レ肩接レ袖　成二夫婦之理一　于レ時嶼子遣二旧俗一遊二仙都一　既逕二三歳一　忽起二懐レ士之心一　独恋二二親一　故吟哀繁発　嗟歎日益女娘問曰　比来観二君夫之貌一　異二於常時一　願聞二其志一　嶼子対曰　古人言　少人懐レ士　死狐首レ岳　僕以二虚談一　今斯信然也　女娘問曰　君欲レ帰乎　嶼子答曰　僕近離二親故之俗一　遠人二神仙之堺一　不レ忍二恋眷一　輙申二軽慮一　所レ望暫還二本俗一　奉レ拝二二親一　女娘拭レ涙歎曰　意等二金石一　共期二万歳一　何眷二郷里一　棄遺一時　即相携徘徊　相談慟哀　遂拚レ袂退去　就二于岐路一　於レ是女娘父母親族　但悲レ別送之　女娘取二玉匣一　援二嶼子一謂曰　君終不レ遺二賤妾一有二眷尋一者　堅握レ匣　慎莫二開見一　即相分乗レ船　仍教令レ眠レ目

と記されている。

常世国での夢のような三年間を過ごしたのち、望郷の念にかられた嶼子は、乙女の歎きをふり切って故郷へふたたびもどっ

てくるが、その故郷の状況はというと、

忽到二本土筒川郷一　即瞻二眺村邑一　人物遷易　更無レ所レ由　爰問二郷人一曰　水江浦嶼子之家人　今在二何処一　郷人答曰　君何処人　問二旧遠人一乎　吾聞　古老等相伝曰　先世有二水江浦嶼子一　独遊二蒼海一　復不二還来一　今経二三百余歳一者　何忽問レ此乎　即衒二棄心一　雖レ廻二郷里一　不レ会二一親一　既逕二旬日一

というように、すっかり変わってしまっていた。一変してしまった故郷を目のあたりにした嶼子は、驚きのあまり里人にたずねたところ、何と三百年あまりも経過していることをきかされ、呆然としてその場に立ちつくしてしまう。そして、乙女から決して開いてはいけないといって渡された玉匣をあけてしまうのである。すなわち、

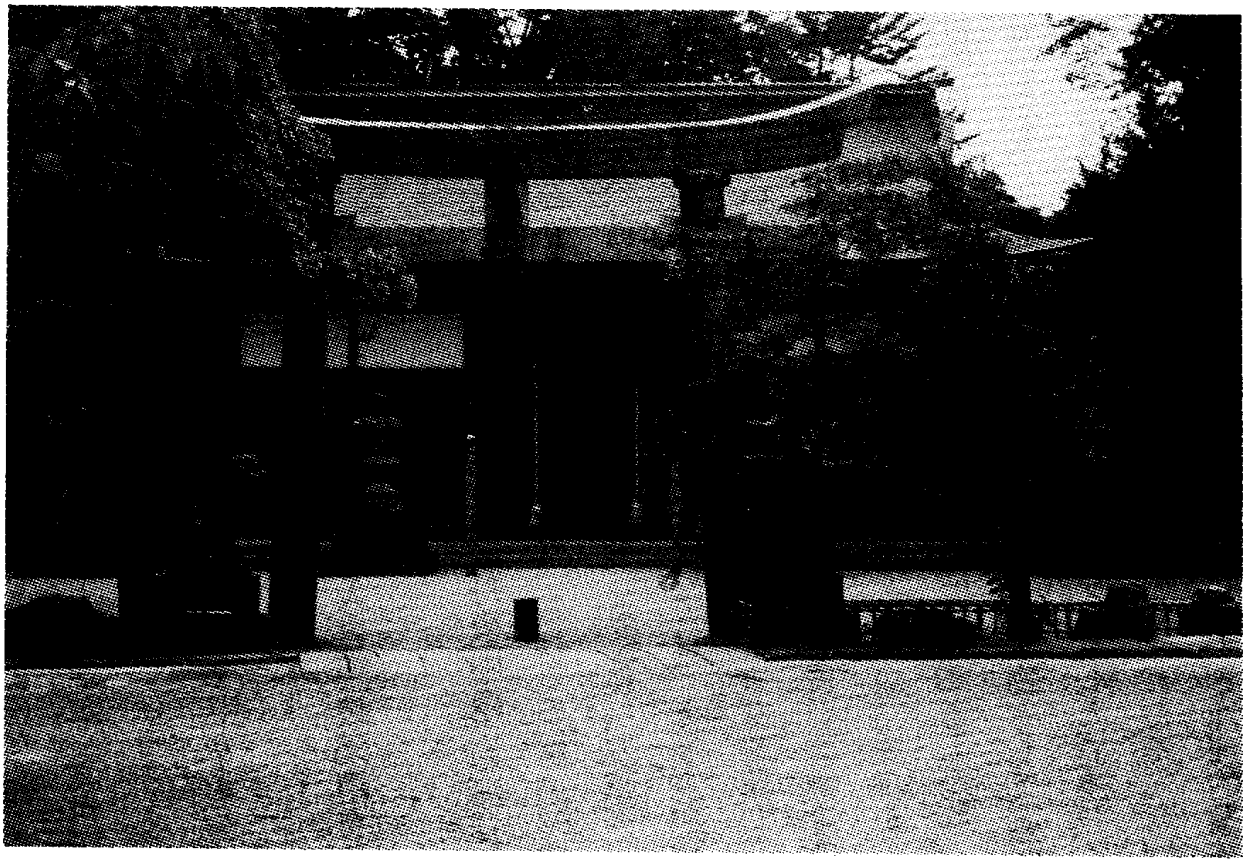
乃撫二玉匣一而感二思神女一　於レ是　嶼子忘二前日期一　忽開二玉匣一　即未レ瞻之間　芳蘭之體率二于風雲一　翩二飛蒼天一　嶼子即乖二違期要一　還知二復難一レ会　廻レ首踟蹰　咽レ涙徘徊

という状況になってしまい、そして、最後に嶼子は涙ながらに乙女を慕って次のような歌を詠むのである。それに神女が答えて歌を詠み、さらに後世の人が歌を加えて伝承は終わっている。

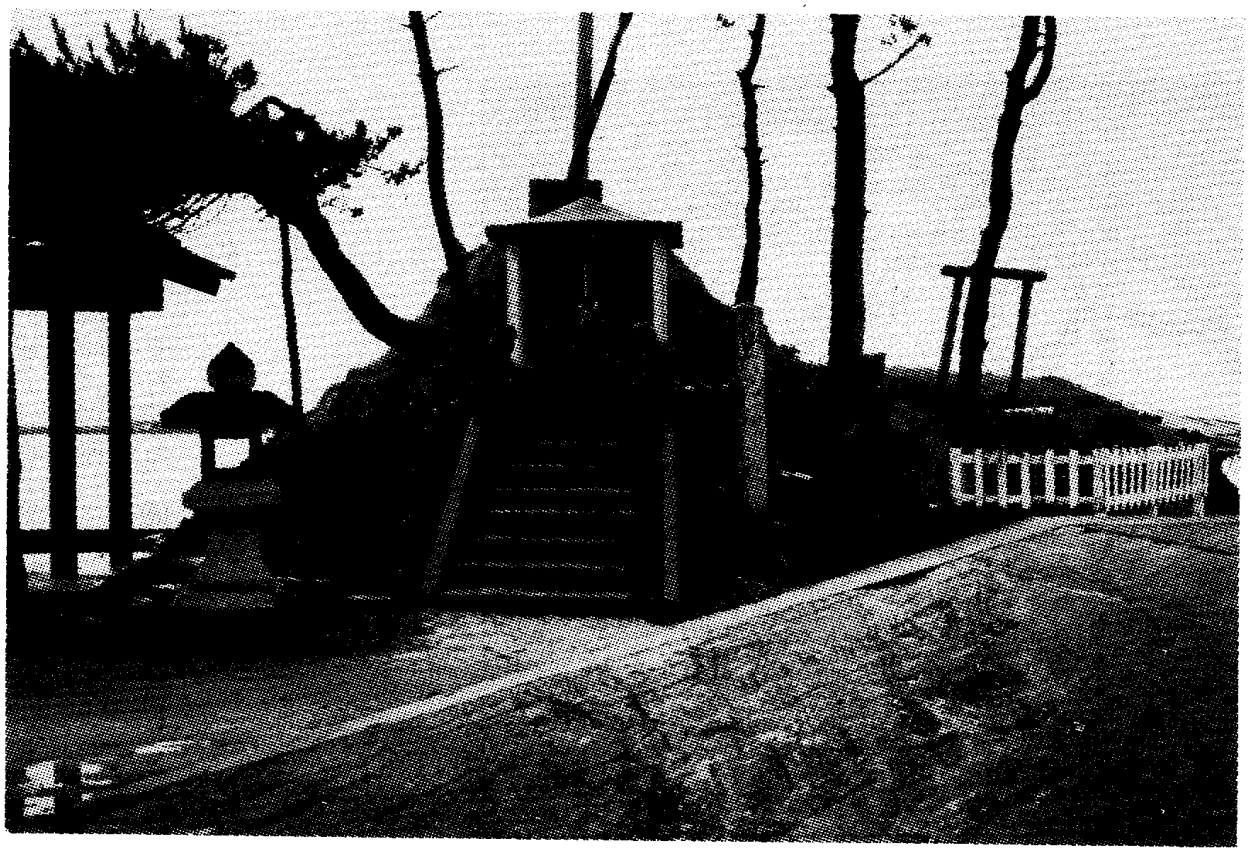
于レ斯拭レ涙哥曰　等許余蘖爾　久母多知和多留　美頭能睿能　宇良志麻能古賀　許等母知和多留　神女遥飛二芳音一哥曰　夜麻等蘖爾　加是布企阿義天　久母婆奈礼　所企遠理等母與　和遠和須良須奈　嶼子更不レ勝二恋望一哥曰　古良爾古非　阿佐刀遠比良企　和我遠礼波　等許與能波麻能　奈美能等企許由　後時人　追加哥曰　美頭能能睿宇良志麻能古我　多麻久志義　阿気受阿理世波　麻多母阿波麻志遠　等許與蘖爾　久母多知和多留　多由万久母　波都賀末等比志　和礼曾加奈志企

これが嶼子および後世の人による歌の部分であり、以上が、『丹後国風土記』の逸文として現在、わたくしたちがみることのできる浦島子伝承である。

いままでみてきたように、浦島子伝承の舞台は、おおむね現在の丹後半島にあてることができる。今日でもこの地域には浦



宇 良 神 社



島 児 神 社

島子を祭神とする古社が各地にみられる。そのなかでも、与謝郡の宇良神社と竹野郡の網野神社は式内社であり、[6] また、竹野郡に所在する島児神社は、浦島子が、この地から常世国へ向かったという伝承をもつ海岸に鎮座している。もとより、これらの神社と浦島子伝承との関係を単純に結びつけることはつつしまなければならないが、それでも、他地域と比較して、この伝承と丹後半島の関係性の強さをみることもあながち否定できないのではなかろうか。

## 三、丹後の海人と隠岐国由良比女神社

『日本書紀』『万葉集』、そして、『丹後国風土記』にみえる浦島子伝承をとりあげたわけであるが、これらの伝承の成立の順序については、従来、諸説がみられる。とくに『万葉集』所載のものと『丹後国風土記』のものとについては、どちらが最古の伝承であるかという位置づけをめぐってさまざまな論及がなされている。しかし、本稿はそのいずれがもっとも古い伝承であるかについて検討を加えることを目的とはしていない。すなわち、本稿の目的は、こうした伝承の発生の背景について考えることにある。もっとも、浦島子伝承をすべて思想上の産物として認識する立場にたてば、本稿でめざそうとしているこうした試みは、それ自体、意味のないことになるであろう。しかし、わたくしは、浦島子伝承についてその内容と丹後半島を中心とする地理的環境とを考え

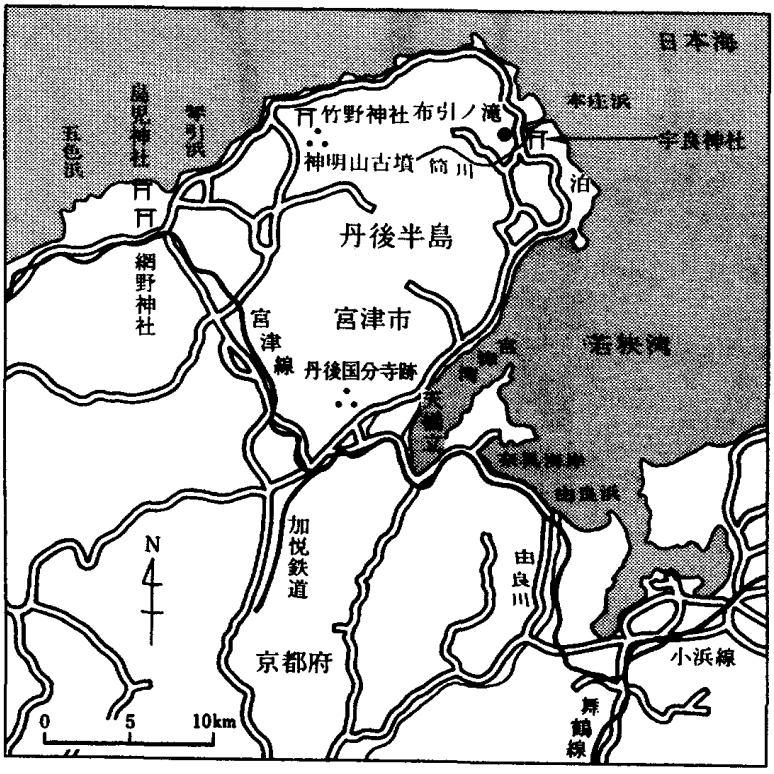



図1　浦島子伝承からみた丹後半島略図

合わせるならば、そこにこの伝承の成立基盤を見出すことができると考えている。つまり、浦島子伝承を単に伝承とか思想上の産物とかと把握するのではなく、そこに何らかの歴史的背景を想定しうるのではないかという立場をとるわけである。

こうした視点に立って、まず、『万葉集』の浦島子伝承と『丹後国風土記』のそれとが、程度の差こそはあれ、共に神仙思想と海人の伝承としての性格を合わせもっていることを確認しておくことにしたい。つまり、こうした二つの要素が中心となって浦島子伝承が形成されている、と把握することができると考えられる。『万葉集』にみられる「常世」「常世辺」とか『丹後国風土記』にみえる「蓬山」「神女」「仙侶」「仙都」とかという語句には神仙思想の影響が強くみられる。また、主人公の浦島子の行動や舞台とされる丹後半島の海岸部に注目するならば、浦島子伝承の背後に海人集団の存在が想起され、この伝承は本来、彼らの伝承であった、と推測することも可能である。この点について、水野祐氏は、浦島子伝承の要素として、海人伝説・神婚伝説・異郷淹留伝説・常世伝説・神仙思想・氏祖伝説の六つを設定され、『丹後国風土記』の浦島子伝承にはこれらのすべてが含まれているとし、『万葉集』のものには最初の四つが、『日本書紀』の伝承には最初の二つがそれぞれ検出できるとされている。(7) そして、これら三つの伝承を共に海人集団に伝承されていたものと規定し、『丹後国風土記』の伝承は丹後国の日下部首の一族に伝えられていたものであり、『万葉集』のものは、摂津国の釣網漁人集団、『日本書紀』のものは丹波国の潜水漁人集団によって伝承されてい

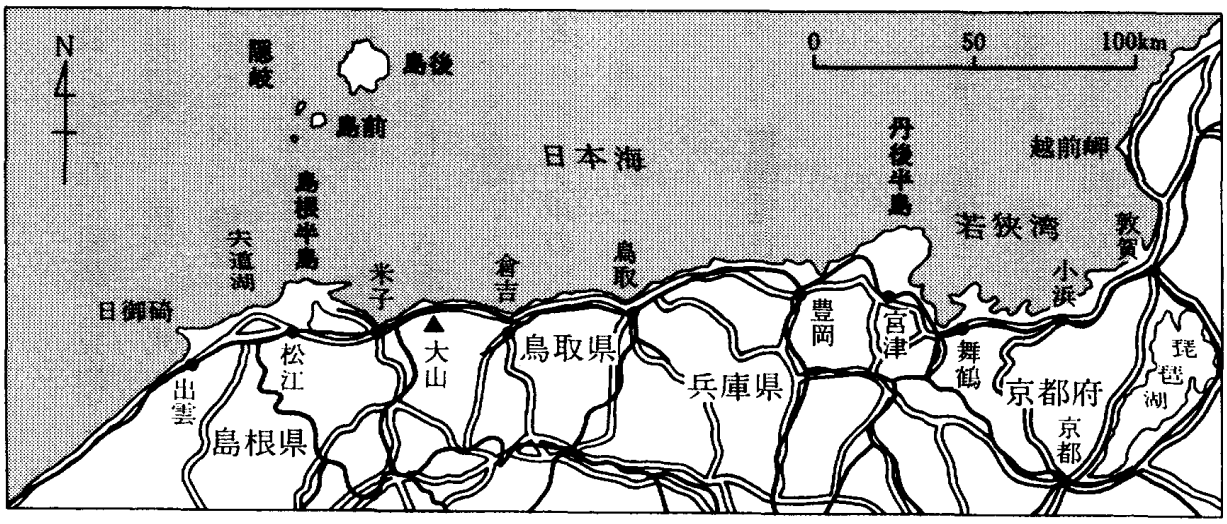



**図2　丹後半島から隠岐にかけての日本海沿岸地域**

たものと結論づけられている。

たしかに海人という点に注目するならば、丹後国から山陰道、そして北陸道にかけて彼らの存在の痕跡を見出すことができる。黛弘道氏の指摘によれば[8]、文献から一見して明らかなものだけをあげても山陰道には丹後（二例）、但馬（一例）、因幡（二例）、伯耆（一例）、出雲（八例）、隠岐（八例）、また、北陸道には若狭（三例）、越前（三例）、能登（一例）、越中（二例）、越後（三例）に海人の足跡がみられる。すなわち、丹後を中心に見れば、西部の山陰道にも東部の北陸道にも地域的にほぼ継続した形で海人の分布を想定することが可能である。そして、丹後半島の位置やその北側に位置する日本海を北上する対馬海流といった地理的環境を考慮するならば、越前・若狭から丹後を経て出雲・隠岐によって囲まれる日本海を共通の生活文化圏とするそれぞれの地域の海人集団の活動が想定できるのではなかろうか。このように考えて大過ないとすると、あらためて隠岐国の存在が注目される。隠岐国は図2からも明らかなように、島根半島の北方約五〇キロメートルの日本海上にあり、大小あわせて一八〇あまりからなる群島である。いわば北のはずれといった位置にあたっている。このことは、のちの史料ではあるが『日本三代実録』貞観九年（八六七）五月廿六日条に[9]、

造二八幅四天王像五鋪一。各一鋪下二伯耆。出雲。石見。隠岐。長門等国一。下二知国司一曰。彼国地在二西極一。堺近二新羅一。

（以下略）（傍点、引用者）

とあることからも察することができよう。

このように、隠岐は日本列島からはるか海上に位置しているわけであるが、一方では黒曜石の産地として縄文期における山陰諸地域との交流を指摘することもできる。すなわち、隠岐の島後には、黒曜石の包含層があり、縄文時代の山陰諸地域の石器原材の供給地になっており、こうした黒曜石を物資とし日本海を媒介とした諸地域間との広範囲に及ぶ交流を想定することが可能である。

これらのことを考え合わせるならば、丹後半島と隠岐とは、はるかにへだたった存在ではあるが、大化前代において日本海

をなかだちとしてそれぞれの地域の海人集団による交流がもたれた可能性を指摘することもできると思われる。こうした可能性が認められるとすれば、隠岐に所在する由良比女神社は興味深い神社である。

由良比女神社は島前に鎮座する式内社であり、『延喜式』神名帳に、知夫郡[10]七座のうちとして、

由良比女神社名神大。元名和多須神。

と記載されている。また、時代が前後するが『続日本書紀』承和九年（八四二）九月十四日条には、

隠岐国智夫郡由良比女命神。海部郡宇受加命神。穏地郡水若酢命神。並預官社[11]。

とも記されている。これらから、由良比女神社は、承和九年（八四二）に他の二社と共に官社の扱いを受けるようになり、『延喜式』神名帳では名神大社とされていることが知れる。また、神名帳には、もとの名は和多須神と称したと記されている。このように由良比女神社が文献に姿をみせるのは平安期以降のことであり、それ以前については文献的に確認することができない。しかし、いうまでもなくこのことは、由良比女神社の起源が九世紀中葉にあるということではない。そうではあるが、実際にこの神社の由来を探るとなると記録的には何ら手がかりとなるものは残されていない。

由良比女神のもとの名とされる和多須神は、和多志神・度津神・渡（わたし）神ともい

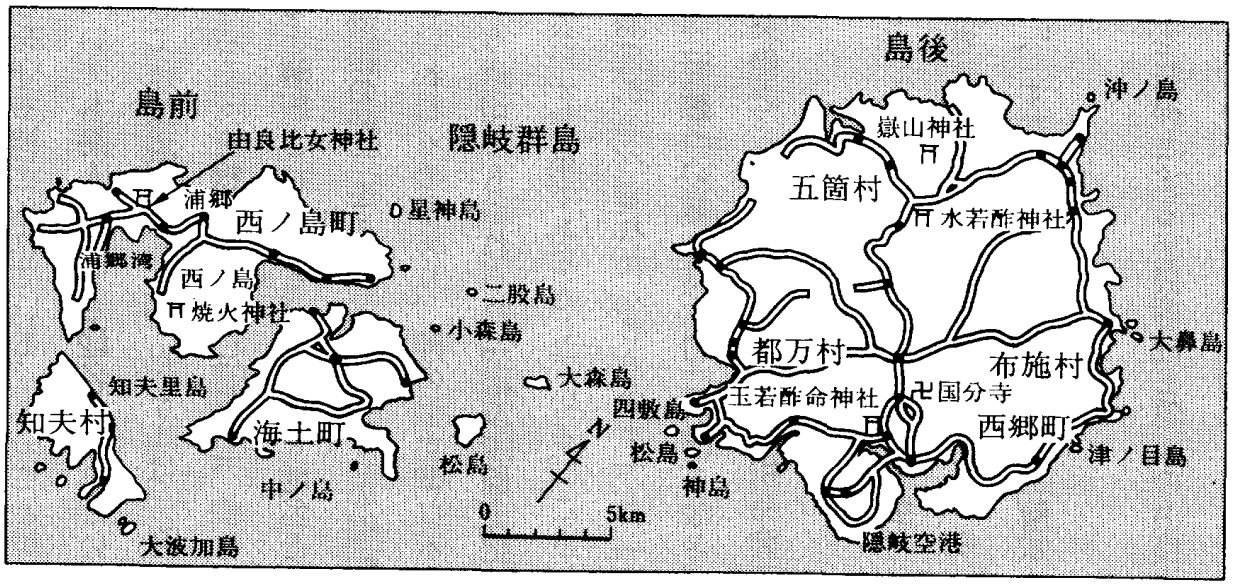



**図3　隠岐と島前の由良比女神社**

われ、五十猛命のこととされ、海峡や江湾などの渡航に便利な地域に鎮座して、そこを守る神とされている。[12] このことから、和多須神は、海人と深い関係があることが理解できる。また、由良比女神の由良についても海人に関する地名であるという指摘が黛弘道氏によってなされている。[13] この他にも由良という言葉自体の解釈をめぐっては諸説みられる。たとえば、海波の「ゆれ」から生じた言葉ともいわれている。[14] この点について三浦祐之氏は「ゆら」「ゆらく」を物自体に潜む「たま」、すなわち魂が自ずから発動する状態を示す言葉であり、具体的には揺れる状態をさす語であると解釈されている。[15] そして、地名としての「ゆら」として『古事記』にみえる「由良の門」や『万葉集』の「湯等のみ崎」「湯羅の崎」をあげられ、それらの場所は、海岸にあり、海が激しく魂を発動させて波を揺らしている場所であるから「ゆら」といわれるのであり、神の坐す聖なる空間であると共に恐しい所でもあった、とされている。また、三浦氏は「うらかす」という語句にもふれられ『出雲国風土記』の仁多郡三沢郷の例をあげて、「うらかす」が「ゆらかす」と同じく呪的な揺さぶりを表わす言葉であるとしている。こうした「ゆら」についての解釈はそれぞれに興味深いものがあるが、わたくしにとっては三浦氏がのべられた「うらかす」と「ゆらかす」の関係性はとくに注目される。三浦氏が指摘された『出雲国風土記』の仁多郡三沢郷の記載を具体的にあげるならば、

郡家西南廿五里　大神大穴持命御子　阿遅須枳高日子命御須髪八握于レ生　昼夜哭坐之　辞不レ通　爾時　御祖命御子乗レ船而　率二巡八十島一　宇良加志給鞆　猶不レ止レ哭之[16]（傍点、引用者）

というものである。ここにみられる「宇良」、すなわち「うら」が「ゆら」に通じるということになる。このことを参考にするならば、由良比女神社の由良、つまり「ゆら」も「うら」に通じると考えることができると思われる。そして、「ゆら」のつく地名が海岸部に多い、という点を考え合わせるならば、「ゆら」を「うら（宇良）」、すなわち、「浦」に通じると解釈することも可能と思われる。

このように「由良」「宇良」「浦」を関連づけて把握するならば、丹後半島の浦島子を祭神とする宇良神社と隠岐の由良比女神社とを男神・女神の対の関係として認識することもできるのではなかろうか。そして、いささかパターン的にとらえすぎる

きらいがないわけではないが、丹後半島と隠岐、そして、その周辺諸地域によって囲まれる日本海を媒介とした海人集団による共通性をもった生活文化圏を想定することも可能であろう。こうした「浦島生活文化圏」ともいうべき生活文化圏を仮定して、丹後半島の海人集団の側に立って西端に位置する隠岐をながめるならば、そこはまさに、はるか彼方の異郷の地ということになろう。その隠岐において海人集団によって祀られていた神がとりもなおさず由良比女神ということになる。こうした状況を浦島子伝承と重ね合わせてみるならば、そこに共通性を指摘することができると考えられる。つまり、浦島子伝承は、大化前代におけるこれらの海人集団の活動によって形成された生活文化圏を基盤として成立した伝承であると把握することができるのではなかろうか。

## 四、浦島子伝承の成立基盤

以上、いままで著名な昔話である『浦島太郎』のルーツである浦島子伝承をとりあげ、その成立基盤について考えてみた。浦島子伝承の研究では、従来、『日本書紀』『万葉集』『丹後国風土記』にみえる諸伝承の比較検討が多かったように思われる。また、浦島子伝承の構成要素である神仙思想や海人との関係についても、どちらの要素がより古いものであるかという点が考察の主な対象とされてきたように思われる。これらの文献批判は、浦島子伝承を考える上で欠かすことのできないものではあるが、それと共に浦島子伝承と海人との具体的な関係についても考える必要があると思われる。言葉をかえるならば、浦島子伝承は大化前代の海人集団と実際にどのような関わりあいをもっているのかという視点も忘れてはならないということである。本稿においては、このことを重視して浦島子伝承をみつめようとした。その結果、丹後半島と若狭・越前の地域を東端とし、出雲・隠岐を西端とする地域によって囲まれる日本海沿岸諸地域に「浦島生活文化圏」ともいうべきひとつの生活文化圏を仮定するにいたった。この生活文化圏の担い手は、いうまでもなく対馬海流などを利用して日本海を航行する諸地域の海人集団である。そ

して、この生活文化圏を規定するひとつの大きな要素が丹後半島の海人集団によって祀られ、浦島子を祭神とする宇良神社であり、もうひとつの要素が隠岐の海人集団によって祀られた由良比女神社である。丹後半島の海人集団にとって　隠岐は海上はるか彼方にある地であり、そこに祀られている由良比女神はまさに異郷の女神ということになろう。こうした大化前代に現実にみられたであろう海人集団の活動やそれによって形成された生活文化圏を基として、そこから生み出されたものが浦島子伝承ということができよう。

次に節をあらためて、こうして生み出された浦島子伝承がどのように展開され、変質していったかについて考えてみることにしたい。

## 五、『扶桑略記』のなかの浦島子伝承

ここでは、『扶桑略記』に引用された浦島子伝承を通して、平安時代において浦島子伝承がどのようにとらえられていたのかをみてみることにしたい。

『扶桑略記』は、十二世紀の後半ごろに皇円によってまとめられた歴史書であり、神武天皇から堀河天皇までの歴史を漢文によって編年体でまとめている。著者である皇円は比叡山延暦寺の功徳院に住した学僧であり、法然の師としても知られる。『扶桑略記』は『本朝書籍目録』によれば、成立当初は三十巻あったとされている。しかしながら、現在ではわずかに第二巻～第六巻、第二十巻～第三十巻までの合計十六巻と神武天皇から平城天皇までの抄本とを残すのみである。『扶桑略記』の特徴としては、仏教関係の記事が多いことがあげられるが、さらには六国史をはじめとして縁起や僧伝といった多様な史料が引用されていることもみのがすことができず、皇円の博識ぶりがうかがわれる。引用された史料には、その出典が明記されているものも多く、それらの中には現在、散逸してしまっているものもあり、こうしたところにも『扶桑略記』の重要性をいうこ

とができる。

こうした博識をもって知られる天台の学僧である皇円によってまとめられた『扶桑略記』に、浦島子伝承がどのように載せられているかということは大変、興味深いことである。またそれは、平安時代の後期において浦島子伝承がどのように把握されていたかを知るための史料としても重要であると考えられる。

具体的に、『扶桑略記』の中の浦島子伝承をみるならば、雄略天皇二十二年七月条に記載がみられる。[17] しかもそこには二種類の浦島子伝承が記されている。まず、はじめの方をみるならば、

丹後国余社郡人水江浦島子乗レ舟而釣。遂得二大亀一。眠間示曰。有レ感来。悟後見レ亀化為レ女。髪髴如レ薄雲之蔽一レ月。驃騒若二流風之廻一レ雪。緑黛亘レ額。丹靨耀レ瞼。其形甚艶。非レ可二馴懐一。島子失レ度迷レ神云。伺人到レ此。而乱二我懐一。神女対曰。春秋易レ過。披霧難レ遇。請君破レ疑。欲レ得レ近レ席。妾有二劣計一。願近二於君一。可乎以不。島子対曰。僕有レ所二恐疑一。具欲二由来一。神女曰。妾蓬莱金台女也。父兄弟皆在レ堂也。玄都之人。与レ天長生。与レ地久徂。飡以二石流一。飲以二玉醴一。駕二遼川之鶴一。逍二遙於雲路一。乗二葉県之鴨一。偃二息於瑰室一。是名二常世界一也。君欲レ取二常世之寿一。廻レ舟可レ赴二蓬山一。浦島子許下諾指二於蓬莱一長生上。神女曰。君暫可レ眠。島子随而眠間。屈二于海中大島一。神女与二浦島子一。携レ手下レ舟。遊行数里到二一大宅一。神女排レ門入レ内。島子佇二立門外一。七少子過而語二島子一曰。吾是亀娘之流仇乎。暫待。亦八少子到日。是亀娘之仇也。然後神女出来曰。七少子是昴星。八少子亦畢星。君レ得レ昇レ天。宜レ无二其疑一。即引二内庭一到二于賓館一昇二鏡台一。褰二於翡翠之帳一。而止宿矣。琴瑟吹歌。異二於下界一也。神女父母。抱レ腕相憐。於レ是命二于厨宰一。薦二玉液磐髓之美餚一。進二雲飛石流之芳菜一。朝従二瑤池一。戯二毛羽之霊容一。夕入二瑰室一。接二神女之襟一。島子忘二其勧娯一。只思二父母一。神女見二其憂色一。具問二由緒一。島子対曰。鳥有二南枝之思一。馬有二北風之悲一。況離レ土之人乎。暫還二故郷一。以慰二此思一。神女含レ情未レ吐。流涙如レ雨。臨レ別。抱レ腕徘徊。授以二玉匣一。誡曰。勿レ開二見之一。島子約諾。遊帰二旧里一。上巳

とある。その内容はというと、丹後国の余社郡の人である水江浦島子が船に乗って釣をしたところ大亀を得た、というところから始まっている。そして、大亀が絶世の美女となり、自分は「蓬莱(とこよのくに)の金台の女」である「亀姫(かめひめ)」であることを浦島子に告げ、共に常世国へ行くことをすすめる。浦島子は、この申し出に同意して海中の大島にいたり、そこで下界では決して味あうことのできないもてなしをうける。しかし、浦島子は残してきた父母のことが忘れられず、その思いは日ましにつのるばかりで気持ちが次第に沈んでいくのであった。亀娘は憂いに沈む浦島子を見かねてその理由を問いただし、浦島子が望郷の念にかられていることを知るのである。浦島子の気持を知った亀娘は涙を雨のように流して悲しむが、浦島子の気持を変えることはできず、別れに際して決して開いてはいけないといいきかせて玉匣を授ける。浦島子は、決して開かないことを約束してその玉匣をもって旧里に帰ることになる。

以上がおおよその内容であるが、興味深いのは、下界にもどった浦島子のその後のことが記されていないことである。浦島子が故郷にもどってみると、すっかり様子がかわってしまっており、途方にくれた浦島子がつい約束を破って玉匣を開いてしまうという場面は浦島子伝承のなかでもクライマックスである。それにもかかわらず、『扶桑略記』では、この部分については何ら記されていないのである。そして、このことは、そのあとに続けて記されているもうひとつの浦島子伝承についてもいえることである。『扶桑略記』にはすでに指摘したように二つの浦島子伝承が引用されている。すなわち、すでにみた浦島子伝承のすぐあとに、

続浦島子伝云。水江浦島子。独乗二釣舟一。曳得二霊亀一。浮二於波上一眠二於舟中一之間。霊亀反化。忽作二美女一。玉顔之艶。南威障レ袂而失レ魂。素質之閑。西施掩レ面而无レ色。眉如三初月出二於蛾眉山一。醫以三落星流二於天漢水。纖躯雲聳。当レ散暫留。軽體鶴立。将レ飛未レ翔。島子問曰。神女有二何因縁一。而化来哉。何処為レ居。誰人為レ祖。神女曰。妾是蓬山之女也。不死之金庭。長生之玉殿。妾之居処。父母兄弟。在二彼金闕一也。妾在昔結二夫婦之儀一。而我成二天仙一。生二蓬莱宮之中一。子作二地仙一。遊二於澄江波之上一。今感二宿昔之因一。来随二俗境之縁一也。宜レ向二蓬莱宮一。将レ遂二曩時之志一。願合レ眼眠。

島子唯諾。随二神女語一。須臾之間。向二於蓬山一。於レ是。神女与二島子一。提携到二蓬莱宮一。而令三島子立二於門外一。神女先入。告二於父母一。而後共八二仙宮一。神女衣香馥々。似三春風之送二百和香一。珮声鏘々。如三秋調之韵二万籟響一。島子已為二漁父一。亦為二釣翁一。然而志成二高尚一。陵レ雲弥新。心在二強弱一。得レ仙自健。其宮為レ体。金精玉英。敷二於丹塀之内一。瑶樹珊瑚。満二於玄圃之表一。清池之波心。芙蓉開レ唇而発レ栄。玄泉之涯頭。蘭菊含レ咲而不レ凋。島子与二神女一。共入二玉房一。薫風吹二宝帳一。而羅帷添レ香。蘭燈照二銀床一。而錦筵加レ彩。翡翠簾褰。而翠嵐巻筵。芙蓉帳開。而素月射レ幌。朝服二金丹石髄一。暮飲二玉酒瓊漿一。九光芝艸。駐レ老之方。百節菖蒲。延レ令之術。妾漸見二島子之容顔一。累レ年枯槁。逐レ日骨立。定知外雖レ成二仙宮之遊宴一。而内生二旧郷之恋慕一。宜下還二故郷一。尋中訪旧里上。島子答曰。久侍二仙洞之筵一。常嘗二霊薬之味一。何非レ楽哉。亦非レ幸哉。抑神女為二天仙一。余為二地仙一。随レ命進退。豈得レ逆レ旨哉。神女与二送玉匣一。裏以二五綵之錦繡一。緘以二万端之金玉一。誡二島子一曰。若欲レ見二再逢之期一。莫レ開二玉匣之緘一。言畢約成。分レ手辞去。島子乗レ舟眠レ目。帰去忽到二故郷澄江浦一（已上続伝略抄）

と記されている。こちらの伝承についても内容を確認してみるならば、水江浦島子が釣に出かけて霊亀を捕獲したところ、その霊亀が美女に変身する。そして、浦島子の質問に対して、自分が蓬莱山の女であること、夫婦になる約束をして自分は天仙として蓬莱宮の中に生まれ、浦島子は地仙として澄江に生まれたことなどを語るのである。美女はそれに続けて二人で蓬莱宮へ向かうことを望む。浦島子もこれにうなづき二人は蓬莱宮へと至り、そこで浦島子は、「久しく仙洞の筵に侍し、常に霊薬の味を嘗む。何ぞ楽しみの非ざるや。亦、幸の非ざるや」といった夢のような生活を送るのである。しかし、そうした生活のあるとき、美女が浦島子の顔をみると、「年を累ねて枯槁し、日を遂ひて骨立す」という容貌になっていた。そこで、浦島子が望郷の念にかられていることを知った美女は故郷に帰ることを浦島子にすすめるのである。そして、別れるときに、再び逢うことをのぞむならば決してあけてはならない、といいきかせて玉匣を与えるのである。浦島子は玉匣をうけとり、決して開かないことを誓って故郷の澄江浦に帰ったとされている。

以上が『扶桑略記』にみられる二つの浦島子伝承である。これらの二つの浦島子伝承の関係については、すでに平田俊春氏が言及されている。[18] 平田氏はこれらの浦島子伝承について、はじめのものは、『浦島子伝』であり、あとのものは、『続浦島子伝』としている。すなわち、『浦島子伝』の方は、現在、『群書類従』の文筆部に収められている。『浦島子伝』と同系のものということになる。しかし、『扶桑略記』にみられるものと『群書類従』に収録されているものとの間にはかなりの差異がみられる。いま、『群書類従』の浦島子伝をあげるならば、

当雄略天皇二十二年。丹後国水江浦島子。独乗船釣霊亀。島子屢浮浪上。頻眠船中。其之間霊亀変為仙女。玉鈿映海上。花貌耀船中。廻雪之袖上。迅雲之鬢間。容貌差麗而失魂。芳顔董体克調。不異楊妃西施。眉如初月出娥眉山。醫似落星流天漢水。島子問神女曰。似何因縁故来吾扁舟中哉。又汝棲何所。神女答曰。妾是蓬山女金闕主也。不死之金庭。長生之玉殿。妾居所也。父母兄弟在彼仙房。妾在世結夫婦之儀。而我成天仙楽蓬莱宮中。子作地仙遊澄江浪上。今感宿昔之因。随俗境之縁。子宜向蓬莱宮。将遂曩時之志願。令為羽容之上仙。島子唯諾。随仙女語。須臾向蓬山。於此神女与島子携到蓬莱宮。而令島子立門外。神女先入金闕。告於父母。而後共八仙宮。神女並如秋星連天。衣香馥々似春風之送百花香。珮声鏘々如秋調之韻万籟響。島子已為漁父。亦為釣翁。然而志成高尚。凌雲彌新。心雖存強弱。得仙自健。其宮為体。金精玉英敷丹塀之内。瑶珠珊瑚満玄圃之表。清池之波心。芙蓉開脣而発栄。玄泉之涯頭。蘭菊含咲不稠。島子与神女共入玉房。薫風吹宝衣。而羅帳添香。紅嵐巻翡翠。容帷鳴玉。金窓斜素月射幌。珠簾動松風調琴。朝服金丹石髓。暮飲玉酒瓊漿。千莖芝蘭駐老之方。百節菖蒲延令之術。妾漸見島子之容顔。累年枯槁。遂日骨立。定知外雖成仙宮之遊宴。而内催故郷之恋慕。宜還旧里尋訪本境。島子答云。暫侍仙洞之霞筵。常嘗霊薬之露液。非是我楽哉。抑神女施姉範島子翫夫密進退在左右。豈有逆旨乎。雖然蔓常不結。眠久欲覚。魂浮故郷。涙浸新房。願吾暫帰旧里。即又欲来仙室。神女宣然哉。与送玉匣。褁以五綵。緘以万端之金玉。誡島子曰。若欲見

再逢之期。莫レ開二玉匣之緘一。言了約成。分レ手辞去島子乗レ船。如レ眠自皈去。忽以至二故郷澄江浦一。尋不レ値二七世之孫一。求只茂二万歳之松一。島子令于レ時二八歳許也。至レ不レ堪。被二玉匣一見レ底。紫煙昇レ天無二其賜一。島子忽然頂二天山之雪一。乗二合浦之霜一矣。(19)

とある。

『扶桑略記』と『群書類従』の両書の浦島子伝承あらためて比較してみると、たしかに同系統のものということは理解できるが、それと同時に差異が認められることもまた明瞭である。もっとも大きな違いは、伝承の最後の部分である。すなわち、『扶桑略記』にみえる浦島子伝承が澄江浦に浦島子が帰ってきたところで終わっているのに対して、『群書類従』の方は、澄江浦にもどってきた浦島子のその後の行動まで記載されている。たとえば、澄江浦に帰郷したときの浦島子は二八歳ばかりであった、というように具体的に浦島子の年令にまで記述が及んでいる。しかし、あたりが一変してしまっていて、親類のものも誰一人としていないことに我を忘れてしまい、開いてはならないといわれていた玉匣を思わずあけてしまうのである。その結果、浦島子はたちまちにして老人になってしまう。

このように、両書の浦島子伝承に大きな違いがあることについて平田俊春氏は、元禄十一年の段階で木下順庵が『浦島子伝』に手を入れ修正をほどこしたため、その後、原型とかなり異なる形の『浦島子伝』ができてしまったと結論づけている。(20) そして、『扶桑略記』に引用されている『浦島子伝』は、『釈日本紀』に収録されている『丹後国風土記』の逸文である浦島子伝承と内容がよく合うことなどから古い形をより残していると判断されている。

また、『扶桑略記』にみられるこれらの二つの浦島子伝承のうち、あとの方、すなわち『続浦島子伝』は、『古事談』の中にも記載をみることができる。そこで、『古事談』の該当条についてみてみるならば、(21) 大きくいって二つの段落から成っている。その前段をみると、

淳和御宇天長二年乙巳、丹後国余佐郡人水江浦島子、此年乗二松船一到二故郷一。爰閭邑浪没物共不二昔日一。山川相遷、人居成

レ淵。于レ時浦島子走二四方一、訪二三族一、無二敢知者一。但有二一老嫗一。浦島子問云、汝何郷人乎。亦知二吾根元一哉。老嫗答云、吾生二此郷一而百有七年、不レ知二敢君事一。唯吾祖父口伝云、昔水江浦島子好レ釣遊レ海永不レ還。其後不レ知二幾百年一云云。浦島子聞二此語一、即雖レ欲レ還二神女処一、敢無レ然。于レ時慕二神女一、開二彼所レ与之玉匣一、紫雲出レ従レ匣、起上指レ西飛去云云。但浦島子辞レ郷之後、経二三百年一還二故郷一。其容顔如二幼童一云云。

とある。これによると、淳和朝の天長二年に浦島子が故郷にもどってきたというのである。ところがあたりの景色は一変してしまっており、これに驚いた浦島子は四方を走り回って訪ねたが誰も浦島子のことを知っている者はいなかった。そのとき、一人の老嫗に出会った浦島子はさっそく自分のことをきいてみたところ、その老嫗は今年で百七歳になるが浦島子のことは知らないという。しかし、祖父の口伝に昔、浦島子が海へ出てそのあと帰ってこず、それから何百年もたってしまったということをいっていたときかされる。この言葉をきいた浦島子は、神女のもとへもどりたいと思ったが、どうしたらよいのか見当がつかず与えられた玉匣を開いてしまう。すると、紫雲が匣より出て西へと消えてしまう。実は浦島子は三百年ぶりに帰郷したのであり、その容貌はまるで幼童のようであったという。

この伝承は、浦島子が帰郷したのは九世紀前半の淳和朝のこととしている。つまり、平安時代の初期に浦島子が常世国からもどってきたという興味深い伝承であるが、そもそもは、『扶桑略記』の淳和天皇の条の一部ではなかったかといわれている。(22) 現在、『扶桑略記』のこの部分は欠失しまっており、確かめることはできないが、もし、そうであるならば、『扶桑略記』の欠失部分を補うことができるわけで、『古事談』のこの部分は重要な意味をもってくる。そのことはさておいて、『古事談』の後半部に目をやると、

此事浦島子伝云、雄略天皇廿二年、水江浦島子独乗二釣船一曳二得亀一。浮二於波上一、眠二於船中一之間、霊亀反化忽作二美女一。玉顔之艶、南威障レ袂而失レ魂。素質之閑、西施掩レ面而無レ色。眉如三初月出二蛾眉山一、靨似三落星流二於天漢水一。纖躯雲聳、当レ散暫留、軽体鶴立、将レ飛末レ翔。島子問云、神女有二何因縁一而化来哉。何処為レ居。誰人為レ祖。神女云、妾是蓬莱山

之女也。不死之金庭、長生之玉殿、妾之居処、父母兄弟在二彼金闕一。妾在昔世結二夫婦之儀一而我成二天仙一生二蓬莱宮之中一。子作二地仙一遊二於澄江波上一。今感二宿昔之因一、来随二俗境之縁一也。宜レ向二於蓬莱山一。於レ是神女与二島子一携到二蓬莱宮一、而令三島子立二門外一、神女先入告二於父母一、而後共入二仙宮一。神女衣香馥々以下春風之送中百和香上。珮声鏘々如三秋調之韻二万籟響一。島子已為二漁父一、亦為二釣翁一。然而志成二高尚一、凌レ雲弥新。心存二強豫一、得レ仙因健。其宮為レ体、金精玉英敷二於丹墀之内一、瑶珠珊瑚満二於玄圃之表一。清池之浪心、芙蓉開レ脣而発レ栄、玄泉之涯頭、蘭菊含レ咲不レ凋。島子与二神女一共入二玉房一。薫風吹二宝帳一而羅帳添レ香。翡翠簾褰而翠嵐巻レ筵。芙蓉帷開而素月射レ幌。朝服二金丹石髓一、暮飲二玉酒一瓊漿一。九光芝草駐レ老之方、百節菖蒲延レ令術。妾漸見二島子之容顔一累レ年枯槁、逐レ日骨立。定知、外雖レ成二仙宮之遊宴一、而内生二旧郷之恋慕一。宜下還二故郷一尋中訪旧里上。島子答曰、久侍二仙洞之筵一、常嘗二霊薬之味一。何非レ楽哉。亦非レ幸哉。抑神女為二天仙一。余為二地仙一。随レ命進退。豈得レ逆レ旨哉。神女与二送玉匣一。裏以二五綵之錦繡一、緘以二万端之金玉一。誡二島子一曰、若欲レ見二再逢之期一、莫レ開二玉匣之緘一。言畢約成、分レ手辞去。島子乗レ舟眠レ目帰去。忽以到二故郷澄江浦一。

以下脱歟又略歟。

と記されている。『扶桑略記』の後半部分の浦島子伝承と『古事談』の浦島子伝承とは、ほとんど同じであり、この点について小林保治氏は、『古事談』の浦島子伝承を『扶桑略記』からの間接的な引用とみなしている。(23)

以上、平安時代における浦島子伝承として、『扶桑略記』に引用されているものをとりあげ、それについて検討を試みてみた。みてきたように、『扶桑略記』に所収されている浦島子伝承といっても、実は二つの浦島子伝承からなっており、それぞれについて異なった背景があることが明らかになったと思う。そして、浦島子伝承の変容という視点からみるならば、これらの異なった背景をもつ二つの浦島子伝承がともに浦島子が故郷へもどったところで終わっていることに注目したい。この点は、浦島子伝承としてはより古いタイプである『丹後国風土記』の逸文や『万葉集』にみられるものとは明らかに相違している。こうしたことは、言葉をかえるならば、『扶桑略記』をまとめた皇円にとって、故郷にもどった浦島子のその後については、

それほど興味の対象とはならなかった、ということをものがたっているように思われる。すでにみたように、『扶桑略記』の二つの浦島子伝承のうちのはじめの方である『浦島子伝』については、『群書類従』に収められているものは、旧里にもどったあとの浦島子の行動を描写している。もっとも、『浦島子伝』はすでにのべたように、木下順庵による修正という問題を考慮をしなければならないという指摘もあるわけであり、単純に伝承の内容を比較することはできないのであるが、いずれにしても、『扶桑略記』においては、旧里にもどったあとの浦島子の様子は記されていないわけである。このことをどのように考えたらよいのであろうか。そもそも、浦島子伝承は、

① 浦島子が神女と出会う〈導入部分〉

⇦

② 蓬莱山（仙宮）での生活〈展開部分〉

⇦

③ 故郷へもどったあとの浦島子〈結末部分〉

という三つのパートからなっている。このうち、②の展開部分が伝承のなかで一番ウェイトを占めているわけであるが、③の結末部分も重要であり軽視することができない。それは、たとえば『丹後国風土記』の逸文と『万葉集』の浦島子伝承とでは結末が異なっていることでも明らかである。すなわち、『丹後国風土記』の逸文では、最後、浦島子は涙にむせんであちこちを徘徊して回るのに対して、『万葉集』では、浦島子は絶命してしまっている。このことは、伝承への興味が蓬莱山での生活という神仙思想にあると同時に、浦島子という人物にも向けられていることをものがたっている。ところが、『扶桑略記』においては、③の結末部分がないわけである。このことは浦島子伝承にとって、どのような効果をもたらすであろうかというと、②の部分の強調、すなわち蓬莱山（常世国）での生活のクローズ・アップ化をもたらすことになろう。このことはとりもなおさず、神仙思想の重視ということであり、伝承の主人公である浦島子が最後にどのような運命をたどるかは、さほど問題にさ

れなくなっているのである。

こうしたことの背景には、当然のことながら、その時代の人々のニーズが反映されていると考えられる。言葉をかえるならば、平安時代の人々の興味のありようを端的に示しているということである。もっとも、本稿でとりあげたのは『扶桑略記』のみであるから、厳密にいうならば、これをまとめた皇円の興味のありようということになろう。しかし、当時の代表的な知識人の一人である皇円のこうした思想は、少なくとも当時の知識人階級に共通するものとして大過ないであろう。このようにみるならば、浦島子伝承は、平安時代に入って明らかに変容しているといえるのではなかろうか。具体的には神仙思想への顕著な志向ということである。そして、このことは、貴族や僧侶といった知識人階級が前時代よりもいっそう神仙思想への傾倒を強めていったことを示している。その原因としては、知識人階級における文人趣味の浸透ということと、そのときどきの現実社会の不安とそこからの逃避が考えられよう。たとえば、平安時代の末期に生きた皇円についていうならば、末法思想の影響は非常に大きかったであろう。そうした末法思想からの逃避、もしくは剋服の手段として神仙思想への傾斜をあげることはあながちまとはずれではないであろう。

## 六、浦島子伝承の中・近世的展開

次に浦島子伝承が中世以後、どのように展開され変容していったかということを、『御伽草子』のなかのひとつである『浦島太郎』を素材としてみてみることにしたい。

『御伽草子』は周知のように、室町時代の末期から江戸時代の初期にかけて成立した庶民向けの短篇小説の総称である。その『御伽草子』のなかでも、もっともよく知られたもののひとつが、ここにとりあげる『浦島太郎』である。まず、はじめにその全体像を順を追ってみてみることにしよう。(24)

昔丹後国に、浦島といふもの侍りしに、その子に浦島太郎と申して、年の齢二十四五の男有りけり。明け暮れ海のうろくづをとりて、父母を養ひけるが、ある日のつれ〴〵に、釣をせんとて出でにけり。浦々島々、入江々々、到らぬ所もなく、釣をし、貝を拾ひ、みるめを刈りなどしける所に、ゑしまが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げける。浦島太郎此亀にいふやう、「汝、生有るものの中にも、鶴は千年、亀は万年とて、命久しきものなり。忽ちここにて命をたたん事、いたはしければ、助くるなり。常には此恩を思ひ出すべし」とて、此亀をもとの海にかへしける。

これが『浦島太郎』の冒頭部分である。この話は書き出しから一見して明らかなように古代の浦島子伝承とはいたるところに大きな相違がみられる。内容を追っていくならば、主人公は浦島太郎という名前になっており、二十四、五歳の若者ということになっている。いうまでもなく浦島太郎という呼称はいままでみられなかったものである。具体的な年令についてもいままでは明記されていなかった。そして、浦島太郎が父母を養っていることも記されている。その浦島太郎が亀をつり上げるのであるが、この亀をもとの海へ返してやることにする。そしてこの時、亀に恩を忘れるなといっている。すなわち、この浦島太郎の言葉には報恩という思想がみられるわけであり、ここに仏教の影響を読みとることが可能である。

さらに、『浦島太郎』の続きに目をやると、

かくて浦島太郎、其日は暮れて帰りぬ。又次の日浦の方へ出でて、釣をせんと思ひ見ければ、はるかの海上に、小船一艘浮べり。怪しみやすらひ見れば、美しき女房只ひとり波にゆられて、次第に太郎が立ちたる所へ着きにけり。浦島太郎が申しけるは、「御身いかなる人にてましませば、かかる恐ろしき海上に、ただ一人乗りて御入り候やらん」と申しければ、女房いひけるは、「されば方へ便船申して候へば、折ふし浪風荒くして、人あまた海の中へはね入れられしを、心ある人有りて、自らをば此はし舟に乗せて放されけり。悲しく思ひ鬼の島へや行かんと、行方知らぬ折ふし、ただ今人に逢ひ参らせさぶらふ。此世ならぬ御縁にてこそ候へ。されば虎狼も、人を縁とこそしさぶらへ」とて、さめ〴〵と泣きにけり。浦島太郎も、さすが岩木にあらざれば、あはれと思ひ、綱を取りて引き寄せにけり。さて女房申しけるは、

「あはれわれらを本国へ送らせ給ひてたび候へかし。これにて捨てられ参らせば、わらはは何処へ何となりさぶらふべき。捨て給ひ候はば、海上にての物思ひも、同じ事にてこそ候はめ」と、かきくどきさめ〴〵と泣きければ、浦島太郎もあはれと思ひ、同じ船に乗り、沖の方へ漕ぎ出す。かの女房の教へに従ひて、はるか十日余りの船路を送り、故郷へぞ着きにける。

とある。すなわち、亀を助けた翌日、浦島太郎が釣に出ようとすると、海上から小船がやってきてそこには美しい女房が乗っている。女房は船が難破したことを切々とのべて、自分を本国へ送ってほしいと願い、浦島太郎は心を動かされて十日余りの船路ののち、女房を故郷へと送り届けることになる。亀と出会ったあとの伝承の展開もいままでのものとはまったく異質である。ストーリーの展開をさらに追うと、

さて船より上り、いかなる所やらんと思へば、銀の築地をつきて、金の甍をならべ、門をたて、いかならん天上の住居も、これにはいかで勝るべき。此女房のすみ所、ことばにも及ばれず、中々申すもおろかなり。さて女房の申しけるは、「一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むことも、皆これ他生の縁ぞかし。ましてや遥かの波路を、はる〴〵と送らせ給ふ事、ひとへに他生の縁なれば、何かは苦しかるべき、わらはと夫婦の契をもなし給ひて、同じ所に明し暮し候はんや」と、こまごまと語りける。浦島太郎申しけるは、「ともかくも仰せに従ふべし」とぞ申しける。さて偕老同穴の語らひも浅からず。天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならんと、互に鴛鴦の契浅からずして、明し暮させ給ふ。

さて女房申しけるは、「これは竜宮城と申す所なり、此所に四方に四季の草木をあらはせり。入らせ給へ、見せ申さん」とて、引具して出でにけり。まづ東の戸をあけて見ければ、春の景色と覚えて、梅や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、なびく霞のうちよりも、鶯の音も軒近く、いづれの木末も花なれや。南面を見てあれば、夏の景色とうち見えて、春をへだつる垣穂には、卯の花や、まづ咲きぬらん、池の蓮は露かけて、汀涼しきさざなみに、水鳥あまた遊びけり。木々の梢も茂りつつ、空に鳴きぬる蝉の声、夕立過ぐる雲間より、声たて通るほととぎす、鳴きて夏とや知らせけり。西は秋

とうち見えて、四方の梢も紅葉して、籬の内なる白菊や、霧たちこむる野辺の末、真萩が露を分け〳〵て、声ものすごき鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。さて又北をながむれば、冬の景色とうち見えて、四方の木末も冬がれて、枯葉に置ける初霜や、山々やただ白妙の、雪に埋るる谷の戸に、心細くも炭竈の煙にしるき賤がわざ、冬と知らする気色哉。

さて、故郷についた女房は浦島太郎に夫婦になってほしいと語りかける。そして、この地を「竜宮城」というと告げる。この竜宮城は、いうまでもなく古代の浦島子伝承にみられる常世国に相当するものであるが、竜宮城という名称自体は、古代においては決して用いられなかったものである。女房の言葉に耳を傾けると、竜宮城の四方は四季の草木をあらわしているという。すなわち、東には春の景色を配置し、さらに、南には夏、西には秋、北には冬の景色をそれぞれあらわしているというのである。これは竜宮城を中心として、ひとつの宇宙が完結していることを意味している。言葉を変えるならば、めぐり変わる季節の中心に位置しているのが竜宮城ということになり、この点では竜宮城は、道教思想にみられる北極星と類似した役割を果たしている。

その後の浦島太郎の行動はというと、

かくておもしろき事どもに、心を慰み、栄花に誇り、明し暮し、年月をふる程に、三年になるは程もなし。浦島太郎申しけるは、「われに三十日の暇をたび候へかし。故郷の父母を見すて、かりそめに出でて、三年を送り候へば、父母の御事を心もとなく候へば、あひ奉りて、心やすく参り候はん」と申しければ、女房仰せけるは、「三年が程は、鴛鴦の衾の下に比翼の契をなし、片時見えさせ給はぬさへ、とやあらん、かくやあらんと心をつくし申せしに、今別れなば、又いつの世にか逢ひ参らせ候はんや。二世の縁と申せば、たとひ此世にてこそ夢幻の契にてさぶらふとも、必ず来世にては、一つ蓮の縁と生れさせおはしませ」とて、さめ〴〵と泣き給ひけり。又女房申しけるは、「今は何をか包みさぶらふべき。自らは、この竜宮城の亀にて候が、ゑしまが磯にて、御身に命を助けられ参らせて候、その御恩報じ申さんとて、かく夫婦とはなり参らして候。また是は自らがかたみに御覧じ候へ」とて、左の脇よりいっくしき箱を一つ取り出し、「あひか

まへてこの箱をあけさせ給ふな」とて渡しけり。会者定離のならひとて、会ふものには必ず別るるとは知りながら、とどめ難くてかくなん、

日数へて重ねし夜半の旅衣　立ち別れつついつかきて見ん

浦島返歌、

別れ行く上の空なる唐衣ちぎり深くは又もきて見ん

さて浦島太郎は、互に名残を惜しみつつ、かくて有るべきことならねば、かたみの箱を取り持ちて、故郷へこそ帰りけれ。忘れもやらぬ来し方、行末の事ども思ひ続けて、遥かの波路を帰るとて、浦島太郎かくなん、

かりそめに契りし人のおもかげを忘れもやらぬ身をいかがせん

とあり別れの場面が描かれている。すなわち、浦島太郎は女房と夫婦となって三年の年月を楽しく過すのであるが、次第に望郷の念にかられ三十日間のいとまを願う。その理由は、「故郷の父母を見すて、かりそめに出でて、三年を送り候へば、父母の御事を心もとなく候へば、あひ奉りて、心やすく参候はん」というものであった。これをきいた女房は、さめざめと泣き、はじめて自分が竜宮城の亀であることを明かし、以前に命を助けられた恩返しに浦島太郎を竜宮城につれてきて夫婦になったことを語る。そして、かたみとして箱を一つ取り出して、決してこの箱をあけてはならないといって浦島太郎にを与えるのである。この別れの場面においても、「会者定離」といった仏教的世界観をあらわす言葉がみえており、ここにも仏教思想の影響をみてとることができよう。さて、人間界に帰った浦島太郎は、どのようになったかというと、

さて浦島は、故郷へ帰り見てあれば、人跡絶えはてて、虎ふす野辺となりにけり。浦島これを見て、こはいかなる事やらんと思ひ、ある傍を見れば、柴の庵のありけるに立ち、「物いはん」といひければ、内より八十ばかりの翁出であひ、「誰にてわたり候ぞ」と申せば、浦島申しけるは、「此所に浦島の行方は候はぬか」といひければ、翁申すやう、「いかなる人にて候へば、浦島の行方をば御尋ね候やらん、不思議にこそ候へ。その浦島とやらんは、はや七百年以前の事と申し

伝へ候」と申しければ、太郎大きに驚き、こはいかなる事ぞとて、そのいはれをありのままに語りければ、翁も不思議の思ひをなし、涙を流し申しけるは、「あれに見えて候古き塚、古き石塔こそ、その人の廟所と申し伝へてこそ候へ」とて指をさして教へける。太郎は泣く〳〵、草深く露しげき野辺を分け、古き塚に参り、涙を流しかくなん、

かりそめに出でにし跡を来て見れば虎ふす野辺となるぞ悲しき

さて浦島太郎は、一本の松の木蔭に立ち寄り、呆れはててぞ居たりける。太郎思ふやう、亀が与へしかたみの箱、「あひかまへてあけさせ給ふな」といひけれども、今は何かせん、あけて見ばやと思ひ、見るこそくやしかりけれ。此箱をあけて見れば、中より紫の雲三すぢ上りけり。是を見れば、二十四五の齢も、忽ちに変りはてにける。

と記されている。すなわち、故郷にもどった浦島太郎は、景色が一変していることに驚き、かたわらにある柴の庵を訪ねたところ、中から八十歳くらいの翁がでてきて浦島太郎に話をきかせる。翁の語るところによると、浦島太郎が船出したのは七百年も以前のことというのである。わずか三年間と思っていた浦島太郎も大変、驚くのであるが、翁も感じいり古い塚、石塔を示して、浦島太郎の家の廟所であることを教える。そこで、浦島太郎はなくなく塚に参り、どうしたらよいのかわからなくなって呆然として女房からもらった箱をあけてしまう。すると紫雲がたちのぼり、浦島太郎は一変に老いてしまう。この時、浦島太郎は、一本の松の木陰に寄りそって呆然としてしまっているのであるが、この情景は『浦島明神縁起絵巻』にみられる描写と類似している。古代の浦島子伝承の場合、箱を開いたところ、浦島子がたちどころに老いてしまい、途方にくれたり息が絶えてしまって、そこで伝承も終わりとなっているのであるが、御伽草子の『浦島太郎』には、さらにその後の展開がみられることが特徴的である。

扨浦島は鶴になりて、虚空に飛び上りける。そも〳〵此浦島が年を、亀がはからひとして、箱の中に畳み入れにけり。

さてこそ七百年の齢を保ちける。あけて見るなと有りしを、あけにけるこそ由なけれ。

君にあふ夜は浦島が玉手箱あけてくやしきわが涙かな

と歌にもよまれてこそ候へ。生有る物、いづれも情を知らぬといふことなし。いはんや人間の身として、恩をみて恩を知らぬは、木石にたとへたり。情深き夫婦は、二世の契と申すが、寔に有りがたき事どもかな。浦島は鶴になり、蓬莱の山にあひをなす。亀は甲に三せきのいわゐをそなへ、万代を経しと也。扨こそめでたき様にも、鶴亀をこそ申し候へ。只人には情あれ、情の有る人は行末めでたき由申し伝へたり。其後浦島太郎は、丹後国に浦島の明神と顕れ、衆生済度し給へり。亀も同じ所に神とあらはれ、夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり。

この部分がそれであり、浦島太郎は鶴となって蓬莱山へおもむき、女房の亀と万代を経たことになっており、「扨こそめでたき様にも鶴亀をこそ申し候へ。只人には情あれ、情の有る人は行末めでたき由申し伝へたり」と結んでいる。さらに、浦島太郎は、丹後国の浦島明神となり衆生を済度したとあり、亀も神となってあらわれて夫婦の明神となったとしている。ここにみられる浦島太郎の明神化という点も『浦島明神縁起絵巻』の結末部分と同じである。

以上が、『御伽草子』のなかの『浦島太郎』である。みてきたようにそれまでの浦島子伝承とは大きなへだたりのあることが理解できよう。まず何よりも、神仙思想の要素がほとんどみられないということがあげられよう。なるほど物語の最後に、鶴となった浦島太郎が蓬莱山にたどりつくという表現があって、こうした点から神仙思想の影響がまったくないということではないが、これ以外にはというと、さしたる要素を指摘することができない。竜宮城にしても、「銀の築地をつきて、金の甍をならべ門をたて」とあるが、「いかならん天上の住居も、これにはいかで勝るべき」としている。ここでは神仙の住む「天上の住居」を引き合いに出して、竜宮城の方が立派であるというのであるから、むしろ神仙思想的な要素を自ら否定しているといえよう。それに対して、物語の背景として、仏教的な要素を指摘することが可能である。冒頭で亀に対して恩を説き、竜宮城への招待もその恩に報いるためとされている。また、浦島太郎の父母への気持がここでは一段と増していることもみのがせない。物語のはじめから浦島太郎が父母を養っていることが記されているし、竜宮城からのいとまごいの理由にも父母に対する思いがのべられている。さらに、故郷にもどってきたあと、塚・石塔のことがでてくるのもこの説話独特のものであるし、

そして、浦島太郎はこの塚に詣でて涙を流すのである。これらのことは、父母に対する孝養をとく儒教思想のあらわれに他ならない。つまり、神仙思想にかわって仏教思想や儒教思想が物語の中心的な思想として位置づけられていることが理解される。

さらに、鶴と亀とによる縁起のよさが強調されていることもみのがせない。もっとも、鶴とか亀とかを延命長寿をもたらすめでたいものとする考えは古代からあったと考えられる。たとえば、鶴については、『甲斐国風土記』の逸文としてのこされている鶴郡の条がその好例としてあげられる。

かひの国のつるの郡に菊おひたる山あり。その山の谷より流るる水、菊を洗ふ。これによりて、その水を飲む人は、命ながくして、つるのごとし。仍て郡の名とせり。[25]

これがその伝承である。命が鶴のように長いというのは、いうまでもなく、鶴の首が長いという形態的なものからの連想であろう。さらに、この『甲斐国風土記』の伝承の場合、中国の菊水の故事との類似がうかがわれ、これらの点から神仙思想の要素を指摘することが可能である。[26] したがって、鶴が長命の象徴であり、めでたいものであるという発想は神仙思想によるものと考えられるから、『御伽草子』の『浦島太郎』にも、そうした神仙思想の影響を認めることはできるわけである。しかし、『浦島太郎』においては、そうした思想としての神仙思想がどうであるとかこうとかというのではなく、それよりもむしろ鶴と亀とが姿をみせることはめでたいことである、という点のみがひたすら強調されているように見うけられる。

また、最後に浦島太郎が浦島明神になるという点も興味深い。というのは、ここに神祇信仰との関係がうかがわれるからである。現在、浦島太郎は宇良神社をはじめとしていくつかの神社の祭神となっているが、こうした庶民信仰としての浦島信仰の基盤を『浦島太郎』にみることが可能である。

## 七、昔話のなかの浦島子伝承

古代の浦島子伝承をとりあげ、その変容をみてきたわけであるが、最後に現在も昔話として語りつがれている『浦島太郎』についてみてみることにする。[27] まず、書き出しの部分をみると、

昔、北前の大浦に、浦島太郎という人がいました。七十あまって八十に近い、一人の母親と二人でくらしていました。浦島は漁師でした。まだひとり者で、ある日、母親が「浦島よ、浦島よ、わたしが丈夫なうちに嫁をもらってくれ」「わしはまだ稼ぎがないから、もらっても食べさすことができん。お母があるあいだは、日に日に漁をして、このままで暮すわい」と、浦島はいいました。

やがて月日がたって、母親は八十、浦島は四十の年になりました。秋のころは北風が、まい日まい日吹いて、漁にも行くことが出来ぬ。魚がとれないので金にもならぬ。そこでお母をたべさすことも出来ないようになりました。「明日は天気になればよいのに」と思って、寝ころんでいました。空模様がいつの間にかよくなっていたので、とび起きて筏舟にのって魚釣りに行きました。東が明るくなるまで釣っても魚は一つもかからぬ、これは困ったことだと思っていると、日がよったころに大きな魚が餌にくいつきました。いそいで上げて見ると、亀がかかっていました。亀は両手を舟べりへもたせかけても、なかなか逃げようともしない。浦島は「鯛かと思へばなんだ、お前は亀だ。お前がいるからほかのは食わんのだ、はなしてやるから早くよそへ行け」といって、亀を海の中になげこみました。

とある。この『浦島太郎』は香川県仲度郡の昔話として採録されたものである。内容を追ってみるならば、ここに登場する浦島太郎は北前の大浦の漁師となっており、年令は四十歳とされている。そして、八十歳の老母を養っている。その浦島太郎が魚釣に出かけ亀を釣り、その亀を放してやるのであるが、放すのは、「鯛かと思へばなんだ、お前は亀だ。お前がいるからほかのは食わんのだ、はなしてやるから早くよそへ行け」と浦島太郎自身がいっているように、慈悲の心からくるものではなく、

むしろ漁のためにじゃまであるというきわめて現実的な理由によるものである。御伽草子の『浦島太郎』にみられた恩を与えるという発想はここにはまったくみることができない。その後の展開を追うならば、

浦島はきざみ煙草でもすってまた釣ったが、どうしても食いつかぬ。困っていると、昼前にまた大魚が餌をくったらしい手ざわりがしました。あげて見ると、こんども亀がかかって来ました。「あれほど、よそへ行くように言ってあったのに、魚はかからないで亀がつれるとは、よくよく運がわるいものだ。」そうは思ったが、また逃がしてやりました。魚を釣らないと帰ることも出来ないので、辛抱して二刻ばかり釣っていると、またなにか食うたものがありました。こんどこそは魚だろうと釣りあげてみると、やはり亀でありました。そこでまた逃がしてやりました。そうこうしているうちに、日が入りかけて来たが、いっこうに魚は釣れぬ。日が沈んでしまったので、帰ってお母にどういおうかと思いながら、筏舟を押していると向うに渡海舟が見えました。そうして何の用があるのか、浦島の方へやって来ました。浦島が舟をおさえる（右舷に向ける）と、向うの舟もおさえる、こちらの舟がひかえる（左舷に向ける）と、渡海舟もひかえる、そしてとうとう浦島が舟と並んでしまいました。渡海舟の船頭が「浦島さん、どうぞこの舟に乗っておくれ。竜宮の乙姫さまからのお迎えじゃ」といいました。「俺が竜宮界に行ったならば、あとにはお母が一人だけのこるから、そんなことは出来ないよ」「お母には不自由なくしてあげとくから、この舟にお乗りよ」と船頭がいうものだから、浦島はなに思わず渡海舟に乗りこんでしまいました。渡海舟は、やがて浦島を乗せると、海の中へもぐって竜宮界に行ってしまいました。

と記されている。この場面もいままでみた伝承とは大きな差違がみられる。すなわち、浦島は、その後も二度、亀を釣り上げてしまい、そのたびに亀をはなしてやるのであるが、「魚はかからないで亀がつれるとは、よくよく運がわるい」という考えしかもっていない。そして、ついに日沈となってしまい、仕方なく帰路につくのであるが、その時、向こうの方から浦島太郎の筏舟に渡海舟が接近してくる。しかしながら、中に乗っているのは美女ではなく、「竜宮の乙姫さまからのお迎え」の船頭ということになっている。ここでも、浦島太郎は、「俺が竜宮界へ行ったならば、あとにはお母が一人だけのこるから、そん

なこと出来ないよ」といい、それに対して迎えの船頭は、「お母には不自由なくしてあげとくから、この舟にお乗りよ」と答えている。実に話の内容が現実生活に即していて、その点で現実的なのである。また、ここでは、御伽草子にみられる竜宮城という表現ではなく、類似の「竜宮」、もしくは、「竜宮界」という言葉が用いられている。さらに、その竜宮でのやりとりも、いままでの伝承とはかなり相違がみられる。

浦島が行って見ると、りっぱな御殿でありました。お姫さまはお腹がすいたろうといって、浦島にご馳走をして、「二、三日遊んで帰るがよい」といいました。浦島も竜宮界へ来て見ると、乙姫さまやきれいな娘もたくさんいるし、着物を着かえさせてくれるしするので、おもわず竜宮界で三年という月日がたってしまいました。そこでもういにゃならぬ（帰る）と思い、乙姫さまにいとまごいをすると、三重ねの玉手箱をくれました。そして「途方にくれたときにこの箱をあけるがよい」と、教えてくれました。それから渡海舟にのせて、ここの山の鼻みたようなところに舟をつけてくれました。

これがその部分であり、海の中にもぐり、竜宮界へたどりついた浦島太郎は、乙姫から二、三日遊んで帰るようにいわれる。実際にすごしてみると、美女もおり、生活も快適なのでついつい長居をしてしまうことになる。そこで乙姫と三年間の年月をすごしたあと、いとまごいをすることになる。それに対して乙姫の方は「途方にくれたときにこの箱をあけるがよい」といって三重の玉手箱を手わたすのであるが、このとき、さめざめと泣くといった描写や自分が助けられた亀であるといった告白は一切、なされていない。このあたりも実にドライというかさっぱりとした描写になっている。つまり、ここには、浦島太郎が竜宮という桃源郷にやってくる必然性がまったくみられないわけであり、この点、いままでの伝承と比較すると物語の構成がルーズということになろう。言葉をかえるならば、浦島はまったく偶然に夢のような竜宮につれてこられた男として描かれているといえる。故郷にもどってきた浦島の行動を記した結末部分に目をやると、

浦島は、村に帰って見ると山の相も変っているし、岡の木もなくなって枯れているのもありました。「三年しか留守にしなかったのに、どうしたことだろうか」と考えながら家の方へ行くと、わら葺きの家に老人がわら仕事をしていました。

その家に入って挨拶をしてから「浦島太郎という人間を知っているか」と、わがことをたずねて見ました。するとその爺は「わしの爺の代に、浦島という人が竜宮界へ行ったがなんぼ待ってももどってこなかったことがあったという話だ」と、話して聞かせました。そこで浦島は「その人のお母はどうしたろう」とたずねると、とうの昔に死んでしまったということでありました。

浦島はわが家の跡へ行って見ました。手洗鉢の石と庭の踏石だけがあったが、ほかには何もなかった。思案にくれて、箱の蓋をあけて見ると、最初の箱には鶴の羽が入っていました。もう一つの箱の蓋をあけて見ると、中から白い煙があがりました。その煙で浦島は爺になってしまいました。三ばん目の箱の蓋をあけて見ると鏡が入っていました。その鏡で顔を見ると、爺さまになっていました。ふしぎなことだと思って見ていると、さっきの鶴の羽が背中についてしまいました。そこで飛び上ってお母の墓のまわりを飛んでいると、乙姫さまが亀になって浦島を見に来て、浜へはい上っていました。

鶴と亀とは舞をまうという伊勢音頭は、それから出来たものだそうである。

となっている。内容を追うと、故郷にもどった浦島太郎は、あたりの景色がすっかり変っているのに驚き、わら葺の家の老人を探しあてて様子をたずねることになる。すると、老人は、「わしの爺の代に、浦島という人が竜宮界へ行ったがなんぼ待ってももどってこなかったことがあったという話だ」ということをきかせてくれる。浦島太郎が自分の母のことをたずねると、「とうの昔に死んでしまった」ということである。浦島太郎は自分の家の跡へ行ってみるのであるが、そこには手洗鉢の石と庭の踏石とがあるだけであった。思案にくれた浦島太郎が乙姫から与えられた三重の玉手箱をあけると、それぞれに鶴の羽、白い煙、鏡が入っていた。白い煙によって老人になってしまった浦島太郎であるが、鶴の羽が背中について飛び立つことになる。そして、母の墓の周囲を飛んでいると、乙姫が亀になって浜にはい上がってきたとして、こうしたことが伊勢音頭の由来まであるとのべて話が終わっている。

この昔話の『浦島太郎』をみると、いままで検討してきたものとは、まったく異質なものを感じる。まず第一に、物語の構

成という点があげられる。これまでのものは、いずれも浦島（子）が亀を助け、助けられた亀が浦島（子）を常世国（竜宮城）へ導く、という展開をもっていた。見方を変えるならば、浦島（子）は亀を助けたがゆえに常世国（竜宮城）へ迎えられるわけであり、いわばストーリーに必然性がみられた。しかし、昔話の『浦島太郎』には、そうした配慮はまったくなされていない。

また、第二としては、昔話の『浦島太郎』の場合、神仙思想や儒教思想といった要素は一応、みられるもののそれらが前面にでてくるということはなく、むしろ、物語のなかに消化されてしまっているようにみうけられる。それに変わって、物語の前面におしだされているのは、より生活に密着した現実的な側面である。言葉をかえるならば、土着的もしくは民衆的な面が強調されているということである。これは、多くの昔話についていえることでもあろうが、『浦島太郎』の場合にも明らかに指摘することができる。

## 八、結　語

浦島子伝承について、その成立からはじまって、変容の過程を検討してきた。古代にその起源をもち、しかも現在にいたるまで昔話として語られ続けている伝承というのは、数ある日本の伝承の中でもさほど多くはないであろう。その意味でも浦島子伝承は、とりわけ重要な伝承ということができる。加えて、そのなかには、神仙思想や仏教思想あるいは儒教思想といった興味深い要素がもりこまれていることもみのがせない。そして、それらの要素が古代・中世・近世・近現代といったその時代時代に応じて伝承のなかで強調されたり、弱められたりしている点もはなはだ興味深いことである。本稿はそうした点に関心をもち、浦島子伝承の変容の過程を追求しようとしたものである。しかし、その目的が十分に果たせたかというとはなはだ心もとない限りである。特に中世以降の浦島子伝承に関してはさらに詳細な分析が必要であることを痛感しているが、紙幅も尽

きたのでいまはひとまず擱筆することにしたい。

（註）

（1）下出積與『古代神仙思想の研究』（吉川弘文館、一九八六年）一七三頁。

（2）この点については、かつて「浦島子伝承の成立基盤」（黛弘道編『古代国家の歴史と伝承』所収、吉川弘文館、一九九二年）において考えたことがあり、そこで得た結論を本稿でも基本的には踏襲している。

（3）『日本書紀』雄略天皇二十二年秋七月条（新訂増補国史大系、吉川弘文館、一九八一年）三八八頁。

（4）『万葉集』巻九〈一七四〇・一七四一〉（日本古典文学大系、岩波書店、一九六八年）三八五～三八七頁。

（5）『風土記』（日本古典文学大系、岩波書店、一九七五年）四七五～四七七頁。

（6）『交替式・弘仁式・延喜式　前扁』延喜式巻十、神祇十（新訂増補国史大系、吉川弘文館、一九七二年）二七九～二八〇頁。

（7）水野祐『古代社会と浦島伝説』上巻（雄山閣出版、一九七五年）一〇四～一〇六頁。

（8）黛弘道『建令国家成立史の研究』（吉川弘文館、一九八二年）九一～九二頁。

（9）『日本三代実録前扁』貞観九年五月廿六日条（新訂増補国史大系、吉川弘文館、一九七六年）二一八頁。

（10）『交替式・弘仁式・延喜式　前扁』延喜式巻十、神祇十（前掲書）二九六頁。

（11）『続日本後紀』承和九年九月十四日条（新訂増補国史大系、吉川弘文館、一九七六年）一四五頁

（12）宮地直一・佐伯有義監修『神道大辞典（縮刷版）』（平凡社、一九八六年）一四六九頁。

（13）黛弘道『律令国家成立史の研究』（吉川弘文館、一九八二年）一〇三頁。

（14）島根県神社庁編『島根の神々』（島根県神社庁、一九八七年）二八二頁。

（15）三浦佑之「ゆら」（古代語誌刊行会編『古代語誌－古代語を読むⅡ』所収、桜楓社、一九八〇）

（16）『風土記』（前掲書）二二六頁。

（17）『扶桑略記』雄略天皇二十二年七月条（新訂増補国史大系、吉川弘文館、一九四二年）十八～十九頁。

(18) 平田俊春『日本古典の成立の研究』(日本書院、一九五九年)三一二頁。
(19) 『群書類従』第九輯(続群書類従完成会、一九八七年)三二五〜三二六頁。
(20) 平田俊春氏、註(17)。
(21) 『古事談　上』(古典文庫、現代思潮社、一九八一年)二四〜二六頁。
(22) 平田俊春氏、註(17)。
(23) 『古事談　下』(古典文庫、現代思潮社、一九八一年)二一七頁。
(24) 『御伽草子(下)』(岩波書店、一九九〇年)一六〇〜一七〇頁。
(25) 『風土記』(前掲書)四五〇頁。
(26) 拙稿「風土記のなかの神仙思想」(風土記を読む会編『風土記の神と宗教的世界』所収、おうふう、一九九七年)。
(27) 『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎 ― 日本の昔ばなし(四) ―』(岩波書店、一九八八年)六三〜六六頁。